

平成 29 年度（公財）兵庫丹波の森協会
魅力ある地域づくりの推進

平成 29 年度
丹波の森研究所活動報告

報 告 書

平成 30 年 3 月

（公財）兵庫丹波の森協会 丹波の森研究所

目 次

はじめに

1 平成 29 年度調査研究・活動報告

1-1 地域づくり支援事業（アドバイザー派遣）

- (1) 丹波市柏原地区……………2
- (2) 丹波市遠阪地区……………2
- (3) 篠山市油井地区……………2
- (4) 丹波市新井地区……………3

1-2 美しい村づくり支援事業（まちづくり活動助成）

- (1) 地球育ミュージアム研究会……………4
- (2) たんばオープンガーデン交流促進調査……………4

1-3 丹波の森研究所の充実

- (1) 地域再生プロジェクトチーム会議……………5
- (2) 丹波の森研究所研究交流会……………6

1-4 地域づくり支援事業

- (1) かいばら雛めぐり実行委員会コーディネーター事業……………7

2 調査研究（自主研究）

森構想30年「これまでとこれから」……………9

2-2 丹波の森構想 30 周年に向けての学識経験者へのヒアリング

【参考資料】

- ・アドバイザー報告
- ・地球育ミュージアム研究会
- ・たんばオープンガーデン交流促進調査報告

はじめに

丹波の森研究所は、「丹波の森構想」（人・自然・文化・産業の調和した丹波地域づくり）を推進するシンクタンクや支援組織をめざして、平成 8 年（1996 年）、財団法人丹波の森協会（現、公益財団法人兵庫丹波の森協会）によって設けられました。

中瀬勲所長を中心に、地域づくりに関する諸分野に関する調査研究を行ってきましたが、平成 28 年度をもって退任され、平成 29 年度は、関西学院大学の角野幸博先生を新所長に迎え、新たなスタートとなりました。

また、平成 30 年度は「丹波の森構想 30 周年」であり、また県政 150 周年となる節目の年度となります。近年、少子高齢社会の到来とともに、将来人口予測が出され、社会情勢の大きな転換期を迎えております。そうした変化に対応すべき新たな丹波の森構想が模索されているところであります。

今後丹波の森研究所としては、こうした社会的要請に応えていくよう求められています。その意味においても、丹波の森研究所としても新たな展開を図るべきところにあります。

丹波の森研究所の主たる業務は、地域づくりにおける相談、アドバイス、情報提供、学習会などを通じた地域づくりの支援のほか、丹波の森づくりに関する調査研究、講演や報告会などを通じた啓発・普及、行政の施策・事業に関するアドバイザー協力を行うほか、「丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム推進協議会」の調査企画部分を担っています。

事業実施に当たっては、丹波の森研究所の登録研究員 11 名で実施しています。

■丹波の森研究所 所員（平成 30 年 3 月現在）

研究所所長	角野 幸博（丹波の森公苑長兼務）
研究所次長	長澤 光一（丹波の森協会事務局長）
主任研究員	門上 保雄
登録研究員	上岡 典子
	横山 宜致
	塩山 沙弥香
	片平 深雪
	小橋 昭彦
	出町 慎
	谷垣 友里
	門上 幸子
	垣内 敬造
	宮川 五十雄
内田 圭介	

1 平成 29 年度調査研究・活動報告

丹波の森研究所は、丹波地域の地域づくり（活力と魅力ある地域づくり）を自主研究・事業の中心テーマとして、各地域の支援を実施してきました。

近年、篠山市、丹波市ともに、小学校区（地区）ごとに設置されたまちづくり協議会や自治協議会などを中心とする地域づくりが進められています。丹波の森研究所は、このような動向を踏まえつつ、地域・行政と丹波の森研究所が情報を共有しながら、次の3つの側面から支援していくことを基本方針として、事業を実施しました。

- ①地域づくり支援事業（アドバイザー派遣）
- ②美しい村づくり支援事業
- ③調査研究（受託業務を含む）

1-1 地域づくりアドバイザー派遣事業

(1) 丹波市柏原地区

- 協議会名称：かいばら雛めぐり実行委員会
- 協議内容：実行委員会コーディネート
- 派遣期間：平成 29 年 7 月～平成 30 年 3 月

- ①平成 29 年 7 月 27 日（木）
- ②平成 29 年 8 月 28 日（月）
- ③平成 29 年 10 月 26 日（木）
- ④平成 29 年 11 月 10 日（木）
- ⑤平成 29 年 12 月 18 日（月）
- ⑥平成 30 年 2 月 26 日（月）
- ⑦平成 30 年 3 月 19 日（月）

- アドバイザー：上岡典子研究員
- ・アドバイザー業務としては、柏原地区の雛めぐりをテーマとして、地域の歴史的建造物でのひな人形の展示、伝統的な稲継の雛人形、雛人形にまつわる歴史的人物の紹介などをまち歩きを通して紹介するための様々な調整を行った。



かいばら雛めぐりポスター

(2) 丹波市遠阪地区

- 協議会名称：遠阪アサヒの森づくり協議会
- 協議内容：森林保全活動サポート
- 派遣期間：平成 29 年 5 月 20 日（土）
- アドバイザー：門上幸子研究員
- ・アドバイザー業務としては、整備内容の確認、作業時の注意事項や活動時の安全管理を行った。



作業前に、整備内容・注意事項等を確認



作業の様子（遊歩道の修繕）



集合写真

(3) 篠山市油井地区

- 協議会名称：油井鎮守の森を守る会
- 協議内容：森林保全活動サポート
- 派遣期間：平成 30 年 3 月 17 日（土）
- アドバイザー：門上幸子研究員
- ・アドバイザー業務としては、企業の森づくりの活動の一環として実施される「椎茸植菌」の作業手順の確認や作業上の注意事項を伝え、活動のサポートを行った。

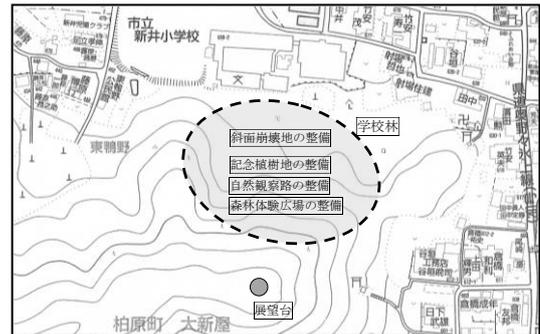


植菌作業のサポート



作業終了後

- 担、必要資材、業者委託等を検討する。
- 再生活用計画実現に向けた年次計画を検討。
- 斜面崩壊部の土留工事など、PTA や地域住民等のボランティア作業では実施困難な作業もあり、これらについては業者委託が必要となる。
- 作業実施に当たっては、ヘルメット、土留用資材、階段整備用の丸太・杭などの資材購入が必要となる。
- 整備後の環境教育等の活用を踏まえ、専門家による樹木を中心とした生物調査を行う。



(4) 丹波市新井地区

- 協議会名称：丹波市立新井小学校
- 協議内容：学校林の活用について
- 派遣期間：平成29年12月22日（金）
- アドバイザー：門上保雄主任研究員
 - アドバイザー業務としては、学校林の現況と問題点等についてヒアリングを行った。
 - また、今後の整備の方向性や進め方について助言を行った。
- 学校林再生活用プロジェクト（後日提案）
 - 現在、本校南側の学校林は児童の遊び場として限定的な活用がなされている。また、PTA 父兄の皆さんの協力を仰ぎながら、下刈りや土留作業などの整備を行ってきた。
 - 今後は、児童の自然体験や環境教育の場としてのより充実した場として整備し、学校林としての活用を図りたいと考えている。
 - ついては学校林をこれらの活用に合わせて総合的に整備するための計画づくりとともに、実施のための仕組みづくりを児童・PTA・地域住民・教員を当事者としてワークショップ等を通して考えていきたい。
- 学校林再生活用計画の策定（案）
 - 森林インストラクターを中心として、PTA、地域住民（自治協議会）、教員、児童を含めたワークショップ等を通して、意見集約を図り、計画づくりを進める。
 - 再生活用計画に伴う作業内容に合わせた役割分

1-2 美しい村づくり活動支援事業

(1) 地球育ミュージアム研究会(三たん)

●趣旨

- ・丹後、但馬、丹波の、三たん地方の環境拠点が連携し、相互啓発を図るとともに、環境保全、環境学習、環境ツーリズム振興等、環境を活かした発展と三たん地方の絆をはぐくむ事を目的に、そのあり方を探求し実践する。

●めざす成果

- ①基本サービスを磨く
- ②環境学習の質の向上
- ③環境ツーリズムの振興
- ④地域の資源保全マネジメント

●今年度の取組

- ・日時：平成 29 年 6 月 27 日（第 9 回）
- ・場所：宇治市植物公園
- ・内容：公園内施設の視察
今後の連携活動について
- ・今年度の展開：三たん内の他の施設を交え、いくつかを巡るツアーとして 10 月頃に実施すると決定。（コーディネイト：上岡研究員）



宇治市植物公園温室

(2) たんばオープンガーデン交流促進調査

- 目的：たんばオープンガーデン交流促進調査は、オープンガーデンを通じた多様な交流・展開など魅力ある地域づくり活動を促進支援するため、現況調査を行った。

- 調査：平成 29 年 4 月 23 日(日)、24 日(月)、5 月 28 日(日)、29 日(月)

- 開催：丹波市 22 ヶ所、篠山市 20 か所

●開催者へのヒアリング

- ・チラシ（案内地図）制作をはじめ、すべて「丹波の森花くらぶ」が主催し、行っている。
- ・新規の参加者が少ない。きれいなお庭の家はいくつかあるのだが。声掛けは難しい。

- ・参加者同士、横のつながりが弱い。
- ・花緑の施設見学会など、横のつながりも含め、あれば良いと思う。
- ・行事へのボランティア参加の要請が多いが、参加は他のスケジュールから難しい。



1-3 丹波の森研究所研の充実

(1) 地域再生プロジェクトチーム会議

1) 第 1 回（平成 29 年 7 月 20 日）

●議題

- ・地域再生プロジェクトチーム会議について
- ・管内の地域再生大作戦の取組状況について
- ・丹波の森協会の取組みについて
- ・丹波地域の新たな地域づくりについて

●議事（別添議事録参照）

- ・丹波の地域づくりをどのような理念で今まで進めてきたのか。30 周年を機に、次にどうつないでいくのかを考える機会だと思っている。
- ・30 年前というのは、いわゆるバブル経済期だった。土地の値段が上がリ、まだまだ開発が行われていくであろうという時期だったが、その中で、秩序あるまちづくりをどうしていくか。
- ・30 年経っていく中で、当然、社会環境が大きく変わってきている。もともとの理念は、尊重すべきところもあるが、時代の変化に合わせて具体的な施策というのは変わっていかねばいけない。30 年を契機にもう一度、丹波地域や日本が置かれている状況をちゃんと理解した上で、社会環境の変化を理解したうえで、その次の 10 年か、20 年か、30 年かをパースペクティブをもってまちづくりを考えていく。それをこの 30 周年という節目に合わせて考えて、さらに行動していこうという事。
- ・30 年を迎えて、次どうするのか。社会の潮流が変化してきた中で、目指す方向性は何なのかという事を考えなければいけない。総合計画や長期ビジョンを考えると時には社会の潮流の変化というのを整理するので、我々にもその作業が必要になるだろうと思う。例えば人口減少・高齢化が今後どのように丹波地域で、具体的にどう進むのか。また、10 町が支えていたこの組織を 2 市が支えるということが、仕組みとしてどう変えざるを得ないのかというのも大きな変化だろう。それ以外に、社会の変化としても、産業の構造や人の動きや情報など、世界レベルで流動化、国際化している。それが、丹波地域に大きな影響を与えているし、働く仕組みや産業の仕組みも変わってきている。

これまでの丹波の森の理解と、次の丹波の森は加えてこういう概念が必要になるというような事だ。次の時代を先取るメッセージ力がきつといるのだろうと思う。

2) 第 2 回（平成 30 年 2 月 9 日）

●議題

- ・地域再生大作戦事業の制度について
- ・大丹波連携について
- ・元町マルシェについて

●議事（別添議事録参照）

- ・事業の評価はしているのか。またそれは地元へフィードバックされているのか。補助金の事業が終わった後、活動は継続されているのか。
- ・毎年、事業採択する際に評価もしたいので、前年度の指標を出して、学識経験者に評価してもらっている。上手くやっている団体は、極めて少ない。
- ・県としては、研究員に対してどういう意見を求めようとしているのか。
- ・研究員は県から派遣するアドバイザーに登録されている。地域から相談があった時に、補助金のメニューの内容をアドバイザーが知った上で助言してもらいたいと思っている。
- ・補助金がなくなると、活動が停滞する。本当は助成金を受けないほうが良かったという意見が地域から出てくることもある。疲弊を加速させた、後に続かなかったというのを多く聞く。本当の地域の元気と助成金の状況は具体的に見てくると、中間支援のあり方としては面白いのではないか。
- ・丹波市では自治協議会の代表の集まりやコミュニティ推進員の集まりの中で情報提供をしている。支所ごとにまちづくり指導員がいるので、情報を持って地域と相談しながら補助金の活用につながるアドバイスをしている。ただ、たくさんメニューがあり、自分たちがやりたいことがわかっているけど、どのメニューを使っていけばいいのかマッチングできていない部分がある。こういうメニューを詳しく実践事例を交えながら、説明してもらえれば、ありがたい。
- ・東京にも兵庫県のショッブがあるが、兵庫として東京にアピール出来ていない。丹波という名前を全国にもっと売っていけるように、情報発信をしていけば、兵庫がついてくるだろう。丹波地域の企業や地元の特産品を売ろうとしている団体が、商品開発をして売りたいという場合の補助を考えていかないといけない。地域再生というと、その場所で何が出来るかという話ばかりになる。

(2) 丹波の森研究所研究交流会

1) 第 1 回研究交流会

- 日時：平成 29 年 5 月 18 日（木）13：30～
- 今年度の丹波の森研究所の事業
- ①丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム推進事業
 - ・体験型ツアープログラムの企画・実施
 - ・総合案内（サイン、ガイドブック等）、展示物コンテンツの整備（QRコード）
 - ・フィールドミュージアム百景
 - ・「大地と暮らしの博覧会」実行計画（フィールドミュージアムのオープン記念）
 - ・推進組織の体制づくり
- ②丹波の森構想 30 周年シンポジウム開催準備
- ③たんば交流実践リーダー育成モデル事業
 - ・都市交流・まちづくりリーダー後継者の育成
- ④たんば多世代による地域運営モデル事業
 - ・若い世代の参加による地域運営プランの作成
- ⑤かいばら雛めぐり事業コーディネート
- ⑥三たん地球育ミュージアム研究会
- ⑦たんばオープンガーデン支援事業
- ⑧地域づくりアドバイザー派遣事業
 - ・5 地区（アドバイザー派遣 3 回/地区）
- ⑨地域再生プロジェクトチーム会議
- 丹波の森構想 30 周年シンポジウム開催準備（県政 150 年事業）
 - ・丹波の森構想のこれまでの成果と課題を踏まえ将来に向けた地域づくりを展望する
 - ・丹波の森構想 30 周年記念誌の発行など

2) 第 2 回研究交流会

- 日時：平成 29 年 5 月 18 日（木）13：30～
- 今年度の丹波の森研究所の事業
- ①丹波の森構想 30 周年記念シンポジウム（案）
 - ・日程：平成 30 年 11 月 11 日（木）
 - ・概要：来賓代表あいさつ（井戸知事）
 - ・基調講演（中瀬勲人と自然の博物館）・館長「(仮) 丹波の森づくり 30 年を振り返って」
 - ・パネルディスカッション「丹波の森づくり」
 - ・コーディネーター：角野幸博
 - ・パネル展（ロビー）
 - ・森構想 30 年の歩み：ビデオの作成
- 大地と暮らしの博覧会：フィールドミュージアム・オープニング～コンティニュー
 - ・オープニング：平成 30 年 3 月 4 日（日）大原先生、県下のフィールドミュージアム

3) 第 3 回研究交流会

- 日時：平成 29 年 12 月 7 日（木）15：30～
- 今後の主要事業について
- ①たんばフィールドミュージアム・キックオフシンポジウム
 - ・日程：平成 30 年 3 月 4 日（日）
 - ・概要：○基調講演（大原先生/横浜国立大学）
○事例発表：高校生、大学生のフィールドミュージアムの取組など
○パネルディスカッション「県下のフィールドミュージアム」
・コーディネーター：角野先生
○エクスカージョン（ミニツアー）
○パネル展示
- ②丹波の森構想 30 周年記念シンポジウム（案）
 - ・日程：平成 30 年 11 月 18 日（日）
 - ・概要：○基調講演（中瀬先生）
「丹波の森づくり 30 年を振り返って」
○パネルディスカッション
「(仮) 新たな丹波の森づくり」
・コーディネーター：角野先生
○映像：森構想 30 年の歩み、新たな丹波の森づくり
- ③地域再生プロジェクトチーム会議
 - ・日程：2 月中旬
 - ・概要：兵庫県地域再生大作戦（概要説明、補助メニュー、集落アドバイザー派遣等）

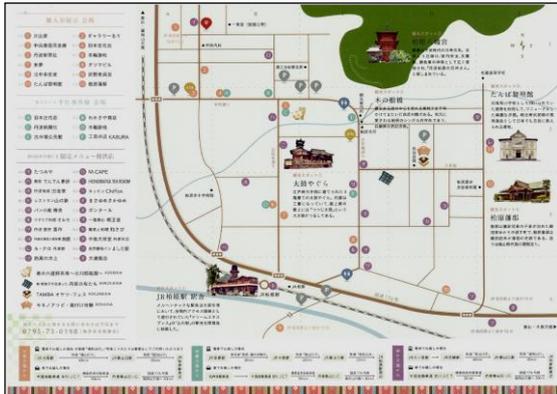
1-4 地域づくり支援事業

(1) かいばら雛めぐり実行委員会

コーディネーター事業

●コーディネーター事業概要

- 柏原地区の雛めぐりをテーマとして、地域の歴史的建造物でのひな人形の展示、伝統的な稲継の雛人形、雛人形まつわる歴史的人物の紹介などをまち歩きを通して紹介するための様々なコーディネートを行った。



かいばら雛めぐりマップ

●拠点会場の展示状況（3月24、25日）

- 「かいばら雛めぐり」では、藩邸、黎明館、関学スタジオの公的拠点施設ほか、丹波新聞社、農協、中兵庫信金の事業所、空き店舗の旧木輪、タツビル、旧本庄花店、来夢、また庭園として北川邸庭園の、11の拠点が設けられた。
- 中心となる藩邸では、「稲畑人形」「織田鶴姫由来のお人形」を展示。特に、鶴姫のお人形は、集客の目玉となった。各部屋に、稲畑人形作家の赤井氏による展示、人形コレクターの竹内氏の稲畑人形セレクション展示、織田鶴姫の人形等の展示、明治大正の古典雛展示が行われた。
- 他の拠点会場の多くが、不要になった雛人形をピラミッド型や階段に並べる「数」を勝負にした展示であるのに対し、柏原では、丹波らしさと藩邸に相応しい格調を持った展示となった。



藩邸—稲畑人形竹内コレクション

●まち並みの彩り

- 柏原の女性陣が力を注いだ「つるし飾り」が、藩邸や商店ほか、一般民家の軒先や玄関を飾った。これらのグレードは大変高く、「三大つるし飾り」の一つ、福岡柳川の「さげもん」に比しても、質、量ともに勝るのではないかとさえ思わせるものであった。



町の心と風景を一つにしたつるし飾り



「軒先」や「ショーウインド」の彩り

●「庭園」活用

- 篠山で重森三玲の庭が雛まつり会場となったのと同様、柏原においても庭園空間の活用を提案し、地元から庭園所有者に打診頂き、一青堂庭園および北川呉服店の庭が公開する事ができた。
- 何れも地域の方からも「こんな良い庭があるのは知らなかった」「奥村川と一緒にあった心地よい空間」等々の声が挙がった。



北川邸庭園でのお茶席

- 雛めぐりの機会を活用し、今後更に、「幽石軒庭園」ほか武家屋敷庭園の公開を進められればと考える
- 一方、庭園や町屋だけではなく、奥村川や木の根周辺、大手通公園、太鼓やぐら周辺等の、町の拠点空間の見直しの機会として雛めぐりを活用していければと思われる。
- 多彩な「体験プログラム」
- 「見る」から「体感」へ。今日のイベント型雛まつりは、雛人形を愛でるだけから、多くは来訪者の「体感」を重要視するものへとシフトしてきている。このため柏原でも、子どもから大人の女性まで、多くの人が「体感」できるプログラムの必要性を説いた。
- プログラムとしては、縮緬細工づくり、丹波布コースター、陶雛の上絵付け、着物着付けほか、食面では、マーチャロンガ（つまみ食いウォーキング）なども行われ、総数 8 つに及んだ。
- 柏原地域外の力を借りて開催しているものとして竹かご、上絵付けなどが挙げられる。
- こうした他地域の体験メニューを盛り込む事は、丹波地域全体を巻き込む糸口になる可能性をもっているが、今後もこの数を運営できるかどうか、地元負担の大きいものは検討していく必要があるかもしれない。



「竹かご」



陶雛・上絵付け



縮緬細工

● 「食」の展開

- 柏原の特長の一つとして、町屋のリノベーションによる「食」の魅力が挙げられる。これを活かすために、マーチャロンガ（つまみ食いウォーキング）を提案した。今回、定員を上回る参加（24名）があり、マチ歩き、スイーツめぐりとしても好評を博した。
- 他方、篠山では、実行委員会が「まち協」連携がベースとなっているため、料理組合等との連携がなかなか進まない面を持つ。篠山の今後の「食」の展開を促す事ともなる事が期待される。
- 柏原では、「マーチャロンガ」他、「食」の面として「淑徳高校のスイーツ販売」、飲食店による「雛めぐり特別メニュー」「オヤツフェス」などが実施された。



マーチャロンガ

- 全体的に、既往の雛まつりイベントに対し、来訪者だけではなく、運営参加者の年齢層も幅広く感じた。また展示の質も高く、町全体を彩ったつるし飾りほか、現代雛の展示も様々な工夫が見られた。（上岡研究員）

2 調査研究（自主研究助成）

2-1 丹波の森構想 30 年「これまでとこれから」

2-2 丹波の森構想 30 周年に向けての学識経験者へのヒアリング